

学びに向かう力の概念的検討

— ガイ・クラックストンの4Rs理論を手がかりに —

新井 浅 浩

要 旨

本稿では、平成29年に改訂された学習指導要領において育成を目指す資質・能力の一つである「学びに向かう力」の概念がいかなる特性を持ちうるかを検討した。その際、イギリス等で展開されている「学び方の学習」の取り組みと、その代表的な理論であるガイ・クラックストンのラーニングパワー理論（4Rs理論）を手がかりとした。その結果、ラーニングパワー理論で提唱されている諸要素はいずれも「学びに向かう力」の構成要素になりうることを、その育成には学習指導要領に提示されている「態度」の育成とともに、「習慣」の獲得が重要であること、その際、授業方法やカリキュラム原理以上に、教師の持つ能力観が重要であることを、を主張した。

キーワード：資質・能力、学びに向かう力、学習指導要領、イギリスの教育、PSHE教育、ラーニングパワー

はじめに

平成29年3月に改訂された我が国の小学校および中学校の学習指導要領は、それまでの「何を知っているか」を中心としたものから、「何ができるようになるか」を中心とすることへの転換、すなわち育成する資質・能力を柱に枠組みをとらえなおすというものへの転換を目指した。その資質・能力は、①「知識・技能」の習得、②「思考力・判断力・表現力等」の育成、③「学びに向かう力・人間性等」等の涵養、の三つを柱とした。このうち、②、③については汎用的能力として論じられてきたものであるが、これまでは、教科内容の獲得か汎用的能力（資質・能力）の育成かという二項対立として扱われ議論されてきた。今次の学習指導要領では、この両者は相互に関係し合うものであるとし、三つの柱のもとに、各教科の目標及び内容が示されることとなった（中央教育審

議会、2016）。

こうした三つの柱による整理は、世界の各国において「キー・コンピテンシー」や「21世紀型スキル」として育成が目指されているものと軌を一にしており、今次の学習指導要領改訂の方向性を定めた中央教育審議会における検討は、国立教育政策研究所による10カ国の教育課程のあり方や変遷と、資質・能力のための教育の工夫を研究した成果を踏まえた結果であるとされている（同上）⁽¹⁾。

ところで、先の三つの柱のうち③「学びに向かう力・人間性等」に含まれる「学びに向かう力」は、前述の①及び②の資質・能力を、どのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素であるとし、中央教育審議会答申においても以下のように指摘されている。

主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能

力、自らの思考の過程等を客観的に捉える力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの。一人一人が幸福な人生を自ら創り出していくためには、情意面や態度面について、自己の感情や行動を統制する力や、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等を育むことが求められる。こうした力は、将来における社会的な不適応を予防し保護要因を高め、社会を生き抜く力につながるという観点からも重要である（中央教育審議会 2016, 30-31頁）。

「学びに向かう力」の育成は、新学習指導要領の各教科の目標においては、おしなべて「主体的に……の態度を養う」という記述となっているが、「学びに向かう力」として具体的に示す資質・能力の内容は「態度」のみでは十分な説明となっていないのではないかと。

本稿では、新学習指導要領における三つの柱のうちの重要な側面である「学びに向かう力」の内実はいかなるものを構想しうるかを検討する。その際、イギリス（ここではイングランド）の初等中等教育の教育課程の全国基準であるナショナル・カリキュラムにおいて議論されてきた資質・能力のあり方を参考にする。なかでも「学びに向かう力」と関連が深いと思われるPSHE（Personal, Social, Health and Economic）教育の展開と、そこで行われている「学び方の学習」（Learning to Learn）を取り上げる⁽²⁾。その際、「学び方の学習」に影響を及ぼしたガイ・クラクストン（Guy Claxton）の提唱するラーニングパワー理論（4Rs理論）を参考にする。本稿でイギリスを取り上げる理由は、イギリスのカリキュラムが資質・能力にあたるスキルを育成することを眼目とした全国基準を導入してきた経緯があり、後述のように現在は、その方向性が軌道修正されているにせよ、依然としてPSHE教育の中でそれが進められ

ている点や、PSHE教育では「学びに向かう力」に関連性の高い「学習スキル」が特に中等学校において取り組まれてきた点にある。クラクストンの提唱するラーニングパワー理論は、その詳細な構成要素を提示し、また、実践においてもイギリス内外での豊富な蓄積を持っている点が注目される。

以下では、まず、我が国の今次の学習指導要領において、「学びに向かう力」はどのように定義され、どのように育成することが構想されているかを整理する。続いて、イギリスのナショナル・カリキュラム体制のなかで育成されてきた資質・能力のうち、とくにPSHE教育について取り上げ、「学び方の学習」が「学びに向かう力」に該当するものをどう説明し、またいかなる実践をしているかを詳述する⁽³⁾。そして、クラクストンのラーニングパワーの理論的特徴と、その実践原理について詳述する。

これらを手がかりに、我が国の新学習指導要領において示されている「学びに向かう力」は、どのような構成要素と実践原理において展開可能であるかを検討する。

1. 新学習指導要領の目指す学力の3つの柱と「学びに向かう力」

新学習指導要領で示された「学びに向かう力」は、先述のとおり「主体的に学習に取り組む態度」を含むものであり、また、自己の感情や行動を統制する能力すなわち自己統制能力や、自らの思考の過程等を客観的に捉える力を含めた、いわゆる「メタ認知」能力であると説明されている。

このうち「主体的に学習に取り組む態度」は、学校教育法第30条に規定され、前回、平成20年に改訂された学習指導要領において設定された学力の三要素の一つとして構成されていたものである。平成20年の学習指導要領の総則の解説には

「主体的に学習に取り組む態度」をどのように育成するかを直接記述した箇所はないが、関連するものとしては、平成20年1月の中央教育審議会答申に示された「学習意欲の向上や学習習慣の確立」が該当すると思われる。すなわち、個に応じた指導の充実、体験的な学習や知識・技能の活用を図る学習活動、職業や自己の将来に関する学習などを通して学ぶ意義を認識したりすることで学習意欲の向上を図り、家庭での学習課題を適切に課すなど家庭学習も視野に入れた指導を行い学習習慣をつけるとされている（文部科学省、2008, 23頁）。

ここで「学習習慣」に言及していることに筆者は注目している。なぜならば、「学びに向かう力」の育成には、「習慣」の獲得が重要であると考えるからである。ただし、平成20年版の学習指導要領解説総則編での言及は家庭学習における、そのみとなっている。

今次の学習指導要領の中における「学びに向かう力」の説明には、先述の「主体的に学習に取り組む態度」の他には、「言語能力」を構成する一環としての「学びに向かう力・人間性等」についての言及がある。ここでも、〈言葉を通じて、社会や文化を創造しようとする態度〉〈自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度〉〈集団としての考えを発展・深化させようとする態度〉〈心を豊かにしようとする態度〉〈自己や他者を尊重しようとする態度〉〈自分の感情をコントロールして学びに向かう態度〉〈言語文化の担い手としての自覚〉が挙げられる（中央教育審議会、2016、別紙2-1；下線筆者）。ここでは、「学びに向かう力」は、おしなべて「態度」で説明されている。

次に「学びに向かう力」の育成については、どのように説明されているだろうか。『小学校学習指導要領解説 総則編』では以下の記述がある（文部科学省、2017b）。

我が国の学校教育の豊かな実践を生かし、体験活動を含めて、社会や世界との関わりの中で、学んだことの意義を実感できるような学習活動を充実させていくことが重要となる。教育課程の編成及び実施に当たっては、第1章総則4に示す児童の発達の支援に関する事項も踏まえながら、学習の場でもあり生活の場でもある学校において、児童一人一人がその可能性を発揮することができるよう、教育活動の充実を図っていくことが必要である（下線筆者）。

以上みたように、今次の学習指導要領において「学びに向かう力」として説明されている要素は、「態度」に限られているが、そのみでは力の内実を理解するには十分とはいえない。また、「学びに向かう力」の育成のためには、「学んだことの意義の実感」や「児童一人一人の可能性の発揮」が提示されているが、これらについてはさらなる検討を要するだろう。

2. イギリスのナショナル・カリキュラムの展開とPSHE教育

2.1 ナショナル・カリキュラムと資質・能力

イギリスのナショナル・カリキュラムにおける、資質・能力の扱い方の変遷を見てみよう。

現行ナショナル・カリキュラムより一つ前の2007年版ナショナル・カリキュラムは10～12教科の必修教科で構成されていたが、それに加えて、ナショナル・カリキュラム全体を通して学ぶべきものとして、6つのキー・スキル（コミュニケーション／数字の活用／情報技術／他者との協働／自分の学習と成績の向上／問題解決）を提示した。さらに、キー・スキルを補完するものとして思考スキルが提示された。これは、「学び方を学ぶ」ことにつながるものである⁽⁴⁾。

現行のナショナル・カリキュラムにおいては、育成するスキルは、その教科の中に組み込まれて提示されていると説明されている。したがって、2007年版のナショナル・カリキュラムと違い、カリキュラム全体を通して学ぶべき資質・能力であるキー・スキルを提示していない。これは、同カリキュラムが、「スキルや能力は内容を伴う文脈で教えなければならない」という考えに基づいて構成されたことによる（新井／藤井 2013, 17頁）。例えば、数学においては、第7～9学年（11歳～14歳）の段階の数学の教科目標に〈問題解決力〉を挙げているが、それは、「金融における数学の利用など、数学内外での問題を解決する正規の数学的知識の活用能力を発達させること」として、いわば領域に固有なものとして示されている。

2.2 PSHE教育と学習スキル

PSHE教育は、人格・社会性・健康・経済の側面の発達を扱った教育であり、これはナショナル・カリキュラムの必修教科とはなっていないが、必修に準ずる扱いである⁽⁵⁾。扱う内容は、後述のように多岐にわたっているが、教科全体を通して次の3つの基礎スキル・特性を育成することを目指している。すなわち、

- 自己の有効性
 - 対人・社会的関係の有効性
 - リスクマネジメントと意思決定
- である。

このうち、〈自己の有効性〉については、建設的な自己省察を含んだ〈自己の向上〉、自己動機づけを含んだ〈レジリエンス〉、成長的思考態度（マインドセット）を含んだ〈自己規律〉、時間のマネジメントを含んだ〈自己組織化〉などで構成されている⁽⁶⁾。

PSHE教育は初等学校と中等学校では異なった展開を見せているが、「学びに向かう力」に通じるものとしては、主に中等学校の実践に見いだす

ことができる。

一般にイギリスの場合は、学校を基盤としたカリキュラム開発の傾向が我が国よりも強いと言えるが、PSHE教育については、とりわけその傾向が強い。したがって、各学校の事情により、そこで展開されるPSHE教育は違っている。一例を見ると、サリー県のジョージアボット校の第7学年（中等学校第1学年）のPSE（同校ではPSHEではなくPSEと呼称している）では、〈学習スキル〉〈シティズンシップ〉〈キャリア教育〉〈機会均等〉〈環境・経済理解教育〉〈健康教育〉という6つのモジュール（単元）を扱っている⁽⁷⁾。

このうち「学びに向かう力」に直接関連するのは、〈学習スキル〉である。ここでは、第7学年を対象として全6回の授業を行っている。このモジュールの目標は、1) 生徒が、ジョージアボット校で定められている授業や宿題に際しての決まりを知ること、2) 「学習と思考のための個人スキル（PLTS）」を知ること、3) 課題発表に際しての協働の方法を身につけ、自分に必要な人格を知ること、4) 学習の方略を身につけ、ストレスを軽減すること、である。PLTSのスキルとは、独立した探究者、創造的思考者、チームで働く者、効果的な参加者、省察的学習者、自己マネージャーという学習者像を持つものである⁽⁸⁾。

このような取組みは、一般的には「学び方の学習（Learning to Learn：L2Lと略することが多い）」と呼ばれる。マニオンとメーサーによればそれらの定義は多様であるが、メタ学習を総称するものとまとめることができるという（Mannion & Mercer, 2016）。

3. ガイ・クラックストンのラーニングパワー理論（4Rs理論）の特徴

3.1 ラーニングパワーを支える理論

学習心理学者のガイ・クラックストンは、学習

者が、よりよく学ぶための力の構成要素を示したラーニングパワーを提唱した。クラックストーンは、ラーニングパワーの理論的背景として、C・ドゥエック、H・ガードナー、J・ハッティ、E・ランガー、レイヴとヴェンゲル、D・パーキンスらを挙げている⁽⁹⁾。

クラックストーンは、「学び方の学習」の発展段階を4つにわけ(表1)、ラーニングパワーをその第4世代に位置づけている(Claxton, 2004)。第4世代の特徴は、1) 学習者自身が学びのプロセスに関与し、2) 学習者が自分を助ける事ができるようにサポートし、3) 教師自身がより良い学習者であるように取り組み、4) 学習が発達的で累積的になるために、単に「できる」ようになるだけでなく「準備も意志も持つ」ようになる事を目指すものである。

クラックストーンは、第4世代であるラーニングパワーをフィットネス・ジムの比喩を用いて説明している(同上書, p.10)。そこでは、学習者は、エクササイズをすることで、より均整のとれた身体になるともいうべきもの(すなわちバランスの取れた有能な学習者)になることを信じている。教師は、フィットネスコーチになぞらえるので、実際にはラーニングコーチの役割を果たす事になる。

第4世代のラーニングパワーは、スキルのみでなく性質(disposition)の獲得を指すものであり、すなわち学習習慣の獲得である(Ibid.,p.17)。

ラーニングパワーの考え方を、具体化したものが、伝統的にいわれる3Rsに替わるものとしての4Rsである(Claxton, 2002)。これは、情意面のレジリエンス、認知面のリソースフルネス、社会面のレシプロシティ、方略/自己統制面のリフレクティブネスの4領域で構成されているが、それぞれの頭文字がRであることから4Rs(理論)と称している(図1)。そしてこの4つのRは、それぞれ4~5の構成要素(学習能力)で説

表1 「学び方の学習」の発展段階

第1世代	成績の向上 「良い授業」は学習内容の獲得に向けられている。 「良い教師」は情報を効果的に伝え、リテラシー/ヌメラシーの能力を向上させる。
第2世代	学習スキルの発達 テストで記憶を想起させる為のコツテクニックの練習 「良い授業」は、上述のものに加え、これらのテクニックを教えることである。
第3世代	自己肯定などの感情的な要素までを含む。 学習のそれぞれの方法の特徴(例: 多重知能理論) 「良い授業」は、学習者のストレスのレベルを削減しつつ、学習者の到達度を上げる。 「どのように」授業を行うかに関係する。
第4世代	文中参照

出典: Claxton, G. (2004) p.2.より作成

明されている。したがって、全部で17の学習能力となる(表2)。

4つのRは、以下のように説明される。

レジリエンス(回復力)とは、学習に進んで取り組み、集中できる状態になることである。そして困難にあっても逃げず、恐怖やフラストレーションを感じても対処できる状態をいう。

リソースフルネス(高い処理能力)とは、さまざまな学び方を進んでできる状態にあることをいう。さまざまな学習方略を身につけており、それをいつ使うかを知っている。

リフレクティブネス(省察性)とは、学習に対

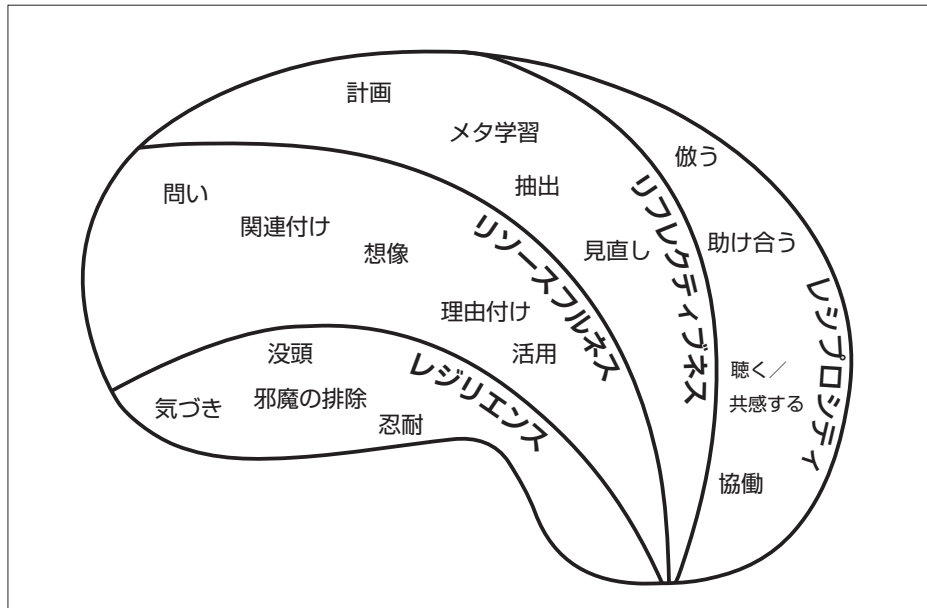


図1 ラーニングパワーの4Rs
出典：Claxton (2002) p.16 より筆者作成

表2 ラーニングパワーの構成要素

領域	学習能力	説明
レジリエンス (回復力)	没頭	フロー状態, 学習に没頭する楽しみ
	邪魔の排除	邪魔になるものを認識し排除する
	気づき	おこっている事に間違いなく気づく
	忍耐	忍耐力と学習においておこる感情に我慢する
リソースフルネス (高い処理能力)	問い	真相を探ろうとし, 状況を楽しむ
	関連付け	共通性, 関連性, 意味を探る
	想像	学習の映画館を上映するように, 心の眼を使う
	理由付け	綿密に整然と考える
	活用	資源を有効利用する
リフレクティブネス (省察性)	計画	あらかじめ計画しておく
	見直し	これまでをふりかえり修正する
	抽出	体験から学ぶ
	メタ学習	学習や学習者としての自分を理解する
レシプロシティ (互惠性)	助け合う	自己依存と社交性のバランスをとる
	協働	他者と学ぶスキル
	共感/聴く	他者の心の中に入る
	倣う	他者の習慣や価値を取り入れる

出典：Claxton (2002) より作成

して戦略的に進んでいる状態をいう。自分の強みと弱みを知るようになる。

レシプロシティ（互惠性）とは、一人で学んだら、他者と学んだりを進んでできる状態をいう。

クラクストンによれば、これら4つの能力は、「進んでできる状態 being ready, willing and able to」を目指す (Ibid., p.17)。これはまさに、「学習に向かう力」を示すものといえる。またクラクストンは、学習者の能力に対する暗黙の信念が、ラーニングパワーに最も劇的な影響を与えるという (Claxton, 1999, p.33)。すなわち、レジリエンスのある生徒は自分の学習能力は拡大できるものと信じており、もろい生徒は、能力は固定されたものと信じている。このことは「学習に向かう力」の検討においても念頭におくべきことである。

3.2 ラーニングパワーのカリキュラム

ラーニングパワー理論では、カリキュラムの設計に際して、次の5つの原理を活用することを提唱している (Claxton et. al 2011, p.123)。

①生涯にわたった学習への準備

カリキュラムを設計する際には、知識、スキル、若い人に獲得して欲しい精神 (mind) の習慣が、学期をまたいで、あるいは何年間のあいだの学習の機会に、どのように育成されるかという長い視点を持つものである。

②学習習慣とカリキュラム知識の融合

ラーニングパワーの17の学習習慣すなわち学習能力のうちの、どれがそれぞれの教科で育成しやすいか、どれがそうでないか、を考える。

③学校の時間や敷地の枠を超えた学習の拡充

校外で行われるプロジェクト等を利用して、教室ではできない学習方法に取り組む。

④学習をより正統的にすること

学校での学習体験を現実世界での学びにより近づけるものである。

⑤学習者自らが、学習の計画づくりに参画すること

学習者が自らの学習の主人公になれるようにする。例えば、自分で学ぶ内容を定める、他人に教える、自分の進歩を自分で評価する、他の学習者の学習メンター／学習コーチとしての役割を果たす、授業評価をして教師に渡す、カリキュラム作成のチームの一員になる、などである。

3.3 ラーニングパワーの授業方法

ラーニングパワー理論では、授業方法を計画するときには活用する6つの原理を示している。それらは以下の通りである (Claxton et. al 2011, p.87)。

①学習の視える化

学習者が、自分の用いている学習習慣や過程を明確に自覚することが必要である。そのために教師は、黒板や教室の掲示等を用いて学習に関する用語やイメージを見せることで、学習を可視化させるのである (写真1参照)。

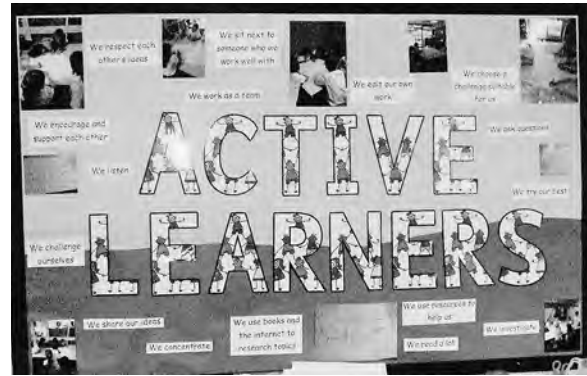


写真1 能動的学習者についての掲示

ハートフォードシャー、ロックザム校にて
2014年10月6日撮影

②分割画面方式の授業

何を学ぶかと、どのように学ぶかという二つの目標を同時に立てて学習者に示す。そのことによって学習者は、学んでいる内容が、能力を高めるための有益な訓練となっていることを知る。

③感情の関与

学習者は、学んでいることにエネルギーを注

ぎ、注意を向けないと学習筋力を鍛えることにはならない。従って学習者たちの興味をひく授業を設計する必要がある。

④不確実性の扱い

学習者が複雑で不確実なものに、どう立ち向かうかを学ぶためには、教師がどのように挑戦的課題を設定して、学習者の学習筋力を伸ばすかを考える必要がある。

⑤（他者との）関係性

学習は、人とつながるものであると同時に一人でするものでもある。学習者が協働するグループの中でどうふるまうかを知っている独立した学習者になる方法を教師は考えるべきである。

⑥リフレクションと責任性

学習者に、自らの学習計画をたて、そこから意味を吸収し、修正する事にかかわらせるような方法を教師が探ることである。

3.4 ラーニングパワーの評価

ラーニングパワーでは、学習者の進歩を3つの次元で捉えている（Claxton et. al 2011, p.151）。第1の次元は、それができるようになったという、いわば筋力の強さともいうべきものである。第2の次元は、広がりであり、身に付いた筋力をいろいろな場面で使えるようになることである。第3の次元は、深みであり、身につけた筋力をより熟練した形で使えるようになることである。

評価の方法としては、自己評価、教師による評価、他の教師や親を含めた学外の大人などによる評価がある。タイミングは日々の評価や学期ごとなどの中期的評価、さらには学年の進行や次の学校段階への進学時が考えられる。

方法は多様だが、例えば、ラーニングパワーの17の能力について、それぞれ4段階で評価し、ダイアグラムにするというものがある。その際、例えば質問する力では、教師による指示の基でできれば「1」、教師が促す中でできるのであれば

「2」、ほとんど指示はなく自身で気づくのであれば「3」、独立して自分の習慣になっていれば「4」、とする、などである（Claxton et. al. 2011, p.153）。

3.5 ラーニングパワーの実践的展開

ラーニングパワーの理論を学校全体のすべての側面の方針として取り上げている学校がある一方で、上に紹介したジョージアボット校のように「学習と思考のための個人スキル（PLTS）」と称する場合や、「社会的情動的側面の学習（SEAL）」「キー・コンピテンシー」という用語で実践されている場合もある。しかしながら、クラクストンによれば、子どもたちを力強く、主体的で、独立した学習者にするには、単に学習理論についてのポスターを掲示したり、第7学年で「学び方の学習」のコースを設置しただけでは不可能であるという（Claxton et. al 2011, p.5）。すなわち、本稿の3.3. および3.4. に示した個々の原理を、あらゆる教科、あらゆる授業の中でも意識していくことが求められる。こうしたことにより、クラクストンの喩でいう学習筋力を鍛えることにつながるであろう⁽¹⁰⁾。

おわりに代えてーラーニングパワー理論から示唆されるもの

クラクストンのラーニングパワーに示されている4つのRは、「進んでできる状態」をさすものであり、今次の学習指導要領にいう「学びに向かう力」の構成要素となりうるものである。本稿で見たように、「学びに向かう力」として提起されているうち「言語能力」を構成するものに、〈自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度〉とあるが、これはリソースフルネス、〈自己や他者を尊重しようとする態度〉〈集団としての考えを発展・深化させようとする態度〉は

レジロシティというキーワードで理解することができる。また、学習指導要領において「学びに向かう力」に関連するものとして挙げられている感情や行動の自己統制能力とは、学習に際して障害となるものを乗り越え、学習に集中する能力といえるのでレジリエンス、また、自らの思考の過程等を客観的に捉える力とはリフレクションというキーワードでとらえることができる。「学びに向かう力」は、その内実が詳説されていないが、ラーニングパワーの4つのRでまとめられている17の能力要素は、いずれも、その構成要素となりえるものである。

「学びに向かう力」は、これらを含めた、いわゆる「メタ認知」能力に関連するとされている。

「メタ認知」能力とは、「現在の自分の状態やこの先の目標、可能な行為や方略、そして結果について内省すること」であり、これが必要な理由は、「メタ認知を働かせることで、知識やスキル、人間性特徴を、それを学んだ文脈以外の領域で使うことができるようになる点である」(C・ファデル他 2016, 134頁)⁽¹¹⁾。これらは「学びに向かう力」を示すものと捉えることができる⁽¹²⁾。

ところで、「学びに向かう力」の育成のためには、「学んだことの意義の実感」や「児童一人一人の可能性の発揮」が提示されているが、ラーニングパワー理論で示されているカリキュラム設計の5つの原理や、授業計画に際して活用できる6つの原理は、その具体的な方法論となり得るものである。また、ラーニングパワーでは「習慣」を重視しており、学習の資質・能力を筋力になぞらえて説明しているが、「学びに向かう力」の育成においても、「態度」よりも「習慣」を付けることにこだわるべきではないか。その際に、これらの原理が、実践のめやすとなるだろう。

さらに、ラーニングパワーは指導を通してというよりも、文化を通して発達するとしている(Claxton, 1999, p.17)。このことは、「学習に

向かう力」の育成においても示唆的である。その際、教師がそのモデルとなることや、どのような能力観や学習者観を持つかが問われるのである。例えば、ドゥエックの研究によってもレジリエンスの高い生徒は、能力は固定化されたものではなく拡大するものと信じ、もろい生徒は、能力は固定されたものと信じている(Claxton, G.1999, p. 35)。3. 1. で述べたように、レジリエンスを持った生徒になるには、その持つ能力観が問題になるが、その為には、教師がモデルになる事が重要といえるだろう。というのも、ラーニングパワーのいう第4世代の「学び方の学習」で触れた教師自身が良き学習者のモデルにならなければならないからである。ここには例えば、イギリスで展開されている「限界なき学びプロジェクト」などの実践が注目に値しよう⁽¹³⁾。

また、「学びに向かう力」の育成は、教育活動全体で取り組むことが望ましく、このための独立した教科や単元は相応しくないといえるかもしれない。しかしながら、「良い学習者は、学習についての知識を豊富に持っている」という研究成果があることから、イギリスのPSHE教育のように、例えば総合的な学習の時間等で、学習方略などについて取り扱うことも必要であろう。

〔註〕

- (1) この国際比較研究は、国立教育政策研究所（2013）、国立教育政策研究所編（2016）にまとめられている。
- (2) PSHE教育の理論と展開については、柴沼／新井編著（2001）および武藤／新井編著（2007）を参照されたい。
- (3) 後述のように、PSHE教育は、イギリスのナショナル・カリキュラムの必修教科ではないが、準必修という扱いであり、科目名称にかかわらず、各学校において、その内容は取り扱われている。
- (4) 思考スキルの中身は、〈情報処理スキル〉〈推論スキル〉〈探究スキル〉〈創造的思考スキル〉〈評価スキル〉で構成されている。
- (5) 必修ではないが、実際にPSHEを実践していない学校はない。ただし、教科としては、宗教団体により設置された（公費で維持運営されている）学校は、宗教科の中でその内容を実施するなど、名称に違いはある。
- (6) PSHE Association. (2017) p.6.
- (7) George Abbot Schoolのブックレット『Personal And Social Education Module1 Study Skills』による。筆者が、2014年10月7日に同校を訪問し、インタビュー、授業観察をした際に入手したものである。
- (8) 独立した探究者では、自分の調査において何をどう進めるべきかを計画するために情報を所有し評価できるようにする。創造的思考者では、何かを創造的に作り出し、考えを探究し、関連づけることで思考スキルを育成する。チームで働く者では、様々な状況において、自分の役割を責任をもって果たしながら他者とともに自信を持って活動することを学ぶものである。効果的な参加者では、自分や周りのものに関する問題に能動的に関わる方法を学ぶ。省察的学習者では、自分の強みと限界を知って、成功のための基準に基づいて現実的な目標を定める。自己マネージャーでは、学習や自己向上に取り組むために、自分自身の責任や主導権、創造性、積極性をみせることで、組織的スキルを発達させる。
- (9) とりわけC・ドゥエックのマインドセット理論、H・ガードナーの多重知能理論、J・ハッティの学習の可視化理論の影響は大きい。マインドセット理論については、キャロル・S・ドゥエック（2008）を参照。多重知能理論については、ハワード・ガードナー（2003）を参照。学習の可視化理論については、ジョン・ハッティ（2017）を参照。
- (10) なお、ラーニングパワー理論は、イギリスのみならず、世界に広がりを見せている。ニュージーランド、オーストラリア、タイ、シンガポール、マレーシア、フィリピン、南アフリカ、ドバイ、アブダビ、アルバニア、スウェーデン、アルゼンチン、チリ、バミューダ、アメリカなどである。Claxton,G., Chambers, M., Powell, G. & Lucas, B. (2011).
- (11) C・ファデルの主導したカリキュラム・リデザイン

センターは、21世紀に必要とされるコンピテンシーの枠組みとして、〈知識〉〈スキル〉〈人間性〉〈メタ学習〉を挙げたが、このうち〈人間性〉〈メタ学習〉をひとまとめにとらえると、この枠組みは、今次の学習指導要領の3つの柱とほぼ対応している。

(12) ちなみに、自己効力感の高い学習者の方がメタ認知を働かせ、その結果として高い水準のパフォーマンスを示すことができるというのは注目に値する。

(13) 「限界なき学び」プロジェクトについては、M・スワン他著（2015）を参照。

〔参考・引用文献〕

- 新井浅浩／藤井泰「イギリスの教育課程」, 国立教育政策研究所（2013）『平成25年度 教育課程の編成に関する基礎的研究報告書6 諸外国の教育課程と資質・能力ー重視する資質・能力に焦点を当ててー』国立教育政策研究所 所収.
- ハワード・ガードナー（2003）（黒上晴夫監訳）『多元的知能の世界ーMI理論の活用と可能性ー』日本文教出版
- 国立教育政策研究所（2013）『平成25年度 教育課程の編成に関する基礎的研究報告書6 諸外国の教育課程と資質・能力ー重視する資質・能力に焦点を当ててー』国立教育政策研究所.
- 国立教育政策研究所編（2016）『資質・能力（理論編）』東洋館出版社.
- キャロル・S・ドゥエック（2008）（今西康子訳）『「やればできる！」の研究 能力を開花させるマインドセットの力』草思社
- 柴沼晶子／新井浅浩編著（2001）『現代英国の宗教教育と人格教育（PSE）』東信堂.
- M・スワン他著（2015）（新井浅浩・藤森裕治、藤森千尋訳）『イギリス教育の未来を拓く小学校 「限界なき学びの創造」プロジェクト』大修館.
- 中央教育審議会（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』p.30.
- ジョン・ハッティ（2017）（原田信之ほか訳）『学習に何が最も効果的か メタ分析による学習の可視化：教師編』あいら出版.
- C・ファデル他著（岸学監訳）（2016）『21世紀の学習者教育の4つの次元』北大路書房
- 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 総則編』.
- 文部科学省（2017a）『小学校学習指導要領』
- 文部科学省（2017b）『小学校学習指導要領解説 総則編』.
- 武藤孝典／新井浅浩編著（2007）『ヨーロッパの学校における市民的社会的教育の発展ーフランス・ドイツ・イギリスー』東信堂.
- Claxton,G.(1999). *Wise Up- Learning to Live theLearning Life-*, Network Educational Press.
- Claxton,G.(2002). *Building Learning Power*. TLO.

Claxton,G.(2004). *Learning to Learn -The Fourth Generation*. TLO.

Claxton,G., Chambers,M., Powell, G. & Lucas, B.(2011). *The Learning Powered School*. TLO.

Mannion, J. & Mercer N. (2016). Learning to learn: improving attainment, closing the gap at Key Stage 3, *The Curriculum Journal*, Vol.27, No.2, pp.246-271.

PSHE Association. (2017). *PSHE Education Programme of Study Key stages 1-5*.

* 本稿は、JSPS科学研究費基盤B「言語文化の観点に基づく汎用的言語能力概念の構築と教科横断型実践モデルの開発」(JP 16H03795) の研究成果の一部である。

Conceptual Exploration of “Power Directed toward Learning”: Insight from G. Claxton’s Four Rs Theory

Asahiro Arai

Abstract

Japan’s national curriculum guidelines for elementary and junior high schools, revised in 2017, promote three competency strands for schools to foster in students, one of which is rendered in English as *power directed toward learning*.

However, when examining the government’s curricula recommendations, *power directed toward learning* was apparently not deemed important enough to explicate, making implementing school level curriculum policy difficult.

This paper explores what sorts of competencies might be taught in order to develop such *learning power* in students.

Principles that require consideration in order to foster competencies associated with *learning power* will also be discussed. To do this, we examine educational initiatives developed in the UK out of the concept of *learning to learn* and G. Claxton’s “Four Rs” theory. We draw on the following hypotheses.

First, all four Rs in Claxton’s *building learning power* theory (Resilience, Resourcefulness, Reflection, Reciprocity) can be crucial elements in cultivating *the power directed toward learning* the ministry of education mentions.

Second, the cultivation of “habit” (which Claxton places under the rubric of “Resilience”) is no more important than fostering “attitude” – mentioned in the government’s guidelines – when *the power directed toward learning* is promoted in each subject.

Third, principles of both curriculum design and teaching methodology, as well as teacher beliefs toward learning are vitally important when teachers teach children to develop *the power directed toward learning*.

Key words: competencies, power directed toward learning, Japan’s national curriculum, UK, PSHE, learning power